

校内別室と教室を併用した居場所の提供について

不登校生徒の状況

対象生徒は中学校入学時から、2年生2学期まで通常どおり登校していたが、3学期に入り欠席が目立つようになった。完璧主義なところがあり、自分が正確にできていないと許せないという性格である。また、クラスメイトの言動にも敏感に反応してしまい、精神的に疲弊してしまうことがある。

具体的な取組

○校内別室の利用による心の安定

当該生徒が教室に行くことを拒むことが多くなってきたことで、担任や加配教員が別室利用を提案した。朝から教室に入ることはせず、別室で過ごすことにした。精神的に落ち込んでいるときは、支援員や担任、学年の教員が別室で話を聞き、当該生徒の心の安定を図った。

○小集団の活動の時間設定

校内別室を利用する複数の生徒と共に、支援員が間に入りながら読書や学習、カードゲーム等を行い、学年を超えて他の生徒との関わりをもつ時間を設けた。同じ部活動の生徒とコミュニケーションが取れた生徒もあり、リラックスして活動することができている。

○不登校生徒の居場所作りと情報共有

職員室には校内別室利用者のホワイトボードを設置し、その日の利用者と利用時間、給食の有無などが全教員に把握できるようにしている。

また、学級担任を中心に、学年の教員が細目に生徒に声かけをし、必要に応じてSCとの連携を図り、情報共有をしている。

クラス	生徒氏名	利用予定時刻	利用状況	備考
1年1組	〇 〇	9:00~10:00	〇	
1年2組	〇 〇	10:00~11:00	〇	
1年3組	〇 〇	11:00~12:00	〇	
1年4組	〇 〇	12:00~13:00	〇	
1年5組	〇 〇	13:00~14:00	〇	
1年6組	〇 〇	14:00~15:00	〇	
1年7組	〇 〇	15:00~16:00	〇	

○支援員による行事への参加のサポート

修学旅行や合唱コンクールの際に、担任の声かけとともに、うまくいかず精神的に落ち込んでいるときは、別室で支援員が話を聞くことで心を落ち着かせ、無事2つの行事に参加することができた。

成果

当該生徒は、2年生3学期は欠席が目立っていたが、別室を継続して利用するようになり、現在は、ほぼ毎日登校できるようになった。別室と教室を併用し、別室で支援員や担任と話すことが心の安定につながり、教室で過ごす時間が多くなった。

課題

当該生徒は、自分を追い込んで落ち込んでしまうことがあるため、SCとの継続・連携を行っていく。

ＳＣとの連携をきっかけとした校内別室での支援

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校 6 年生の 2 学期から不登校傾向にあり、教室での友人との関係性に不安感が強いことから、中学校でも断続的に出席する状態が続き、徐々に学校から足が遠のくようになった。そこで、ＳＣと連携し、中学校 1 年生の 2 学期から校内別室の利用を始めた。

具体的な取組

○ＳＣとの連携、登校回数を増やす

当該生徒は、給食が好きな生徒であった。まずはＳＣとの関わりをもつために、ＳＣと給食を食べるという目的で登校を始めるよう支援をした。その結果、徐々にＳＣとの信頼関係も生まれ、登校日数が週 1 日から週 3 日へ増えていった。

○担任との関わり

担任が給食を校内別室に持って行き会話する機会をつくることで、担任との信頼関係の構築ができていく。「教室で学活を受けたい」、「合唱コンクールを鑑賞したい」という意思を伝えるなど、担任とのつながりから学級や行事まで参加できることにつながった。

○校内別室につなげるための支援

ＳＣと信頼関係ができたところで、校内別室にＳＣと一緒にいくよう支援を行った。ＳＣや支援員、校内別室を利用している他の生徒と雑談等を楽しむなかで、徐々に自分の気持ちを表せるようになっていく姿が見られた。このような支援を続けていくうちに、ＳＣがいなくても校内別室に登校できるようになった。



○校内別室での支援

一日の過ごし方を生徒自らが作成している。自分で計画を立て、一日を振り返ることにより、自分を客観的に見ることができるようになってきた。また、支援員が担任・不登校支援コーディネーターの教員・ＳＣ等との連携を図り、当該生徒の心の安定を目指し支援をしている。

成果

教室とは別の居場所が生徒にできたことにより、担任や教室とのつながりを保ったまま、学校生活を送ることができるようになった。また、別室登校生徒とＳＣをつなげることにより、生徒の心理的安全性がより保たれるようになった。

課題

校内別室のニーズが校内で高まっており、利用者が増えることで、施設面や支援できる内容を検討する必要がある。

児童の興味・関心を基にした校内別室での支援

不登校児童の状況

対象児童は、低学年の頃から、学習や集団への不安などにより、教室に入ることができなかったり、登校できなかったりした状態が続いていた。興味のある学習や行事には、参加したいという気持ちがあり、担任や保護者による関わりや、支援を継続して行っている。

具体的な取組

○安心できる場の設定

安心して過ごせる居場所として、落ち着いて過ごせる静かな場所を校内別室の部屋とした。支援員との信頼関係を築けるよう、対話や当該児童の好きなカード作りの活動等を行った。



○個別学習の時間の設定

一日のうち、学習の時間を児童が自分で決められるようにしている。時間や課題については、当該児童が興味のあるものから決めたり、支援員や担任と相談して決めたりして設定した。自分で主体的に決めることができるため、継続した学習に取り組んでいる。

○学級との関わり

別室に登校し、参加できる時間は別室から学級へ行き、学級との関わりを継続した。事前に担任が当該児童と話し、学習内容を確認したり、支援員が教室まで付き添ったりする等、当該児童が見通しをもって安心して参加できるよう、支援を行った。

○担任・保護者・支援員との連携

担任が保護者と定期的に面談を行い、今後の学習や別室での支援内容について、個別の目標を決め、適切な支援ができるようにした。また、担任が支援員とも定期的に情報共有を行い、当該児童と支援員が信頼関係を継続して築けるよう、今後の支援体制について確認をした。

成果

校内別室に登校するようになり、登校日が多くなった。支援員との関わりの中で、学習に取り組むことも習慣化しつつある。担任や支援員、友達の働きかけで、行事等にも参加しようとする様子が見られた。

課題

限られた教室のスペースの中で、別室に通う児童が増えつつあり、個別の学習の場を設けることが課題である。

不登校生徒への学習支援等について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 3 年生であり、中学校入学時は通常登校していたが、その後欠席が続き、約 2 年間不登校が続いている。入学当初より落ち着きがなく、授業中も、周りと同じように取り組むことが困難であった。小学校からの積み上げがなく、学習面でのサポートも必要である。

具体的な取組

○ICTを活用した授業

不登校生徒のクラスの授業をボランティアが動画撮影し、別室にて視聴できるようにしている。それによって、クラスの様子や授業の様子を知ることができ、教室に入るきっかけとしている。また、テストに向けた学習に取り組むようになっていく。

○ボランティアによる英語の授業

英語に堪能なボランティアにより、週 2 時間、希望者が学年を超えて英語のカードを使った支援を受けている。

生徒同士の輪が広がり、学習意欲が向上している。



○学級との関わりの維持・支援員の声かけ

学級の生徒に校内別室まで給食を運んでもらっている。給食を持って行く時に友達との触れ合いが生まれ、親しい友人とはコミュニケーションを取れるようになった。また、支援員の関わりにより、人の話を落ち着いて聞き、理解する力が向上した。

○美術教員による実技の授業

美術教員が、週 1 回、校内別室で授業を行っている。授業は受けたいが集団が苦手な生徒にとって、別室で教員の指導を受けられることは有意義であった。学年末には評価・評定も行っている。



成果

中学校 2 年生の頃は週 1、2 日程度の登校であったが、3 年生の 9 月からは、週 3 日登校できるようになった。6 月の校内の進路説明会に参加し、その後、高校の説明会にも参加するなど、進路を自ら考えるようになった。

課題

遅滞している学習面の支援として別室での時間を増やし、より多くの教員が見守る体制を構築していく。

安心できる居場所を確保し、児童の不安軽減につながる関わりについて

不登校児童の状況

対象児童は、小学校 1 年生の 1 学期から、登校を渋る日があった。1 年生の 2 学期から 2 年間、校内別室に保護者付き添いのもと登校していた。現在は、保護者が正門まで付き添って登校している。教室と別室で過ごす時間は、半々程度である。未就学の頃から、慣れない場所では口数少ない傾向であった。

具体的な取組

○担任と連携した学級の居場所作り

登校した日は必ず教室に 1 回は入り、担任と話すことをルールとした。宿題提出や給食を取りに行く短時間からスタートとした。慣れてきたところで、週予定を事前に渡し、見通しをもたせるようにした。教室に入る際の緊張が軽減した。

○校内別室の効果的な利用

保護者と別れた後、別室で 10 分ほど過ごし、リラックスした後に、教室に向かっている。教室でうまくいかないときも、心の安全基地の別室があることで落ち着いて過ごすことができている。当該児童は気持ちの表出が少ないため、児童から話せるように支援している。

○支援記録の共有

別室支援員が、別室を利用している児童一人一人の学習場所と学習内容を記録している。担任にも、別室での様子を情報共有できる仕組みとなっている。別室での様子が分かることで、教室での学習機会を増やす手だてにつなげている。



○家庭との連携

当該児童が学校の様子を保護者に伝えていないため、学校での様子が分かりにくいと保護者から相談があった。そこで、1 行ほどではあるが、学校の様子を書いて伝えることで、家庭でも自分のことを話す練習になっている。保護者も児童の変化が分かりやすくなった。

成果

今ではほぼ毎日登校できている。自分で教室での学習を選択した際は、教室で過ごしている。学習は教室でも別室でも、集中して取り組んでいる。自分が教室にいる時間が増えてきていることは当該児童自身も実感しており、自信となっている。

課題

別室など慣れた環境で過ごせるが、他の児童と長時間過ごすことは緊張してしまう。できたことを振り返り自信につなげていく。

校内別室指導について

不登校生徒の状況

対象生徒は中学校 3 年生であり、入学式には出席したが、その後欠席が続き、約 2 年間不登校の状態が続いている。

自分に自信がもてず、学習への不安が大きい状態である。保護者の期待が大きく、本人はプレッシャーを感じている。

具体的な取組

○グループ学習

カードゲーム等を通して、他者とコミュニケーションをもつことができ、自己肯定感の向上につながっている。

また、別室利用生徒たちが自主的に「ゲーム大会」を企画し、支援員が大会実施に向けてサポートを行った。企画の実現に向けて生徒同士でコミュニケーションを取ったり、協力して活動したりしたことで、達成感や自己肯定感を得ることにつながっている。

○ＳＣとの連携

ＳＣとの面談を週 1 回、定期的に行うことにより、生徒が自分の気持ちを表出できる機会としている。行事などで不安なことなどがあれば、ＳＣと整理・確認し、心の安定を図っている。

○学級との関わりの維持

校内別室にて給食の喫食を希望する生徒に対し、通常の学級の教員と一緒に喫食することで、当該生徒の学級の様子などを伝えることができた。また、給食を通して、学級での生活に慣れることにつながった。

○教室復帰後の支援

担任や校内別室指導支援員から当該生徒に、疲れたときに利用できることを伝えた。

進路の実現に向けて担任や校内別室指導支援員と面接練習などのサポートを継続している。



成果

グループ学習や給食を通して、コミュニケーションが取れるようになり、移動教室等に参加できるようになった。学級でも一日過ごすことができている。

課題

校内別室に副教材やデジタル機器が不足しており、学習面の充実が課題である。